

平成 22 年 6 月 18 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20700487

研究課題名 (和文) 子どもの教育環境としての野外教育と情動知能に関する研究

研究課題名 (英文) Research on Emotional Intelligence and Outdoor Education  
as an Educational Environment for Children

研究代表者

黒澤 毅 (KUROSAWA TAKESHI)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授

研究者番号：80367911

研究成果の概要 (和文)：本研究は、子どもを取り巻く家庭や学校、地域の教育環境の中で、野外教育が果たす役割を情動知能の観点から明らかにすることを目的とした。そこで、児童用情動知能尺度を開発し、6泊7日の野外教育プログラム中の児童の情動知能の変化について検討を行った結果、以下のことが明らかになった。(1) 野外教育プログラムを通して児童の情動知能得点は向上した、(2) 児童がプログラムに対して取組む姿勢や活動内容によって情動知能得点に変化が見られた。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of this research was to clarify the role outdoor education plays in the environments surrounding children like home, school, and local community from the viewpoint of emotional intelligence. Then, we developed an emotional intelligence scale for children and studied changes in emotional intelligence of children during the 7-days outdoor program, and clarified the following things. (1) The emotional intelligence scores of children improved through the outdoor educational program, (2) Changes in emotional intelligence scores were associated with children's attitude to the program and the contents of activities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
20年度	1,200,000	360,000	1,560,000
21年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：身体教育学

科研費の分科・細目：野外教育

キーワード：情動知能、野外教育、冒険、子ども、教育環境

## 1. 研究開始当初の背景

社会的現象となり深刻化する子どものいじめや不登校・引きこもり、低年齢化する信じがたい犯罪は、これまでの偏差値教育を見直す必要性を示唆するとともに、大人と子ども

の関係改善の必要性を訴えている。これらは、子どもを取り巻く教育環境である家庭環境、学校環境、そして地域環境がその大きな要因となっているが、これらの教育環境の中で、子ども達にこころの知性をどのように育

成するかが今後カギとなる。その育成は、学力で測定される認知能力向上のための取り組み姿勢にもつながる。つまり、自分の感情をコントロールする能力や他人との関係をうまく処理する能力、親切や思いやりといった学力としての知能ではない情動知能 (Emotional Intelligence) を育む教育を相互に連携した教育環境の中でどのように展開するかが課題となる。

一方、思いやりがあり、しかもたくましい子どもの育成を目指す情動教育プログラムとして貢献できる可能性として野外教育が挙げられる (飯田稔 教育と医学 53 巻 2005)。これまでの野外教育領域における研究成果は、自然環境という日常生活から離れた環境の中で体験から得られる心理的成長について言及したものが多し。いわば情動知能そのものを教育するといっても過言ではない。その教育的効果の代表的なものとして、①達成動機の上昇、②有能感の上昇、③自律心の上昇、④他者受容感・凝集性の上昇、⑤自己決定感の上昇、⑥自然意識・感性の上昇、⑦生きる力の上昇、⑧正義感・道徳心の上昇など (自然体験活動推進協議会 青少年の自然体験活動の充実に向けて (報告書) 平成 17 年度文部科学省委嘱事業 2006) が挙げられる。つまり野外教育領域で学ぶことのできる能力や資質は、学際的であらゆる分野にまたがるということの特徴づけられており、これは子どもの人間的成長・自己形成を促すことを目的としてプログラムが開発・展開されていることから明らかである。すなわち、教育環境の中の一環として野外教育が有効的であることを示唆している。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、社会環境として子どもを取り巻く家庭や学校、地域の教育環境の中で、野外教育が果たす役割を情動知能 (こころの知性) の観点から明らかにし、野外教育の必要性和重要性への示唆を得ることを目的としている。

そこで本研究の目的を達成するために、

(1) 児童用情動知能尺度の作成、(2) 野外教育プログラムの効果検証を実施した。

## 3. 研究の方法

(1) 児童用情動知能尺度の作成について

国内外の情動知能に関する文献をレビューし、内山ら (2001) が開発した情動知能尺度を構成する下位因子を参考にして、筆者が児童用情動知能尺度予備調査用紙を作成した。予備調査用紙は、野外教育プログラムを

行っている実際場面で用いるという観点から簡便性を確保するために、21 項目とした。これらの項目は、1) 自分のよいところをよくわかっている (感情察知)、2) 今、自分が思っていることを口に出して言える (自己効力)、3) やりかけたことは最後までやり通したい (粘り)、4) 何をすることもやる気がでない (熱意) : 反転項目、5) どちらか迷っていても自分で決める (自己決定)、6) いやなことがあっても人のせいにしない (自制心)、7) どんなにむずかしくてもやり遂げるようにしている (目標追求)、8) 人がよるこぼことをするのはうれしい (喜びの共感)、9) 人がなやんだり苦しんだりしているのを見るのはいやだ (悩みの共感)、10) 自分がしたいことでも周りのめいわくなるようなことはしない (配慮)、11) 人がこまっていたら助けてあげたくなる (自発的援助)、12) 物事をお願いするとき、その人の良いところを考えてからにする (人材活用力)、13) 初めての人でも仲良くなれる (人づきあい)、14) いつでもみんなと力を合わせることができる (協力)、15) いつも物事を決めるときには迷う (決断) : 反転項目、16) 「何とかなるだろう」と思うことがおおい (楽天主義)、17) 「今何をすべきなのか」いつも考えている (気配り)、18) みんなを引っ張っていくことができる (集団指導)、19) 新しいことを先頭にたって考えることができる (危機管理)、20) 予想していなかったことが起きてもうまくやる (機転性)、21) 新しい集団や仲間すぐに溶け込む (適応性) という内容の質問である。

これらの質問に対し、S 県内 0 市の小学校 18 校に通う小学 4 年生 1268 名、小学 5 年生 1220 名、小学 6 年生 1218 名の計 3706 名を対象に実施し、分析を行った。

(2) 野外教育プログラムにおける情動知能の効果について

児童用情動知能尺度を用いて 2009 年度に実施された子どもを対象とした長期 (6 泊 7 日) 野外教育プログラム (マウンテンバイク、徒歩による 450km 走破) における情動知能の変化について検討した。プログラムの詳細は表 1 のとおりである。

表 1. 調査を実施した野外教育プログラム

	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日
プログラム	集合	マウンテンバイク	マウンテンバイク	ハイク	マウンテンバイク	マウンテンバイク	マウンテンバイク

調査は、毎日のプログラム終了後に実施されるグループごとのミーティング時にグループ担当の班付きカウンセラーによってグループごとに実施して回収を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 児童用情動知能尺度の作成について

18校3706名から得られたデータについて、1) 正規性を検討するための平均と標準偏差の検討をした結果、4項目を削除し、計17項目を採用した。2) 3回における共通性の検討の結果、3項目を削除して14項目を採用した。3) 最尤法、ノーマルバリマックス回転による2回の因子分析の結果、2項目が削除され、2因子12項目となった。4) それぞれの因子において信頼性を検討するためにクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した結果、因子1においては $\alpha = .772$ 、因子2については $\alpha = .762$ を算出したため、因子1、2における尺度の信頼性は支持された。5) 因子の命名については、因子1は、5項目で構成されており、その内容は状況を判断し、リーダーシップをとる項目など、多いことから「状況判断・他者率先因子」とした。また、因子2については、7項目で構成されており、その内容は対人に配慮し、自分をコントロールする項目が多いことから、「対人配慮・自己統制因子」とした。

次にアンケート調査した各小学校の結果について検討した。全体の情動知能得点の平均(標準偏差)は3.43(1.13)であり、各学年及び性別の平均得点(標準偏差)結果は表2のとおりであり、男子よりも女子の得点が高い結果となった。また、学年が高学年になるにしたがって情動知能得点が低下する傾向となった。特に、「みんなを引っ張っていくことができる」、「新しいことを先頭に立って考えることができる」の項目において得点が低い結果となった。

表2. 対象前小学校平均得点(標準偏差)

	男子	女子
4年	3.43(1.20)	3.61(1.14)
5年	3.38(1.14)	3.45(1.11)
6年	3.29(1.10)	3.40(1.05)

各項目別に情動知能得点を見たところ、項目：みんなを引っ張っていくことができる、項目：新しいことを先頭にたって考えることができる、という他者を率先する内容に関する項目の平均(標準偏差)が、それぞれ2.93(1.24)、2.94(1.17)と低く、項目：反対に人がこまっていたら助けてあげたい、項目：いつでもみんなと力を合わせるこ

ができる、についての平均(標準偏差)は4.01(0.94)、3.64(0.99)となり、他者への配慮や協力といった得点が高い結果となった。児童の発達段階における情動知能の特色であると考えられる。

##### (2) 野外教育プログラムにおける情動知能の効果について

###### ① プログラムを通じた情動知能得点の変化について

プログラム初日から最終日までの情動知能得点の変化を図1に示した。

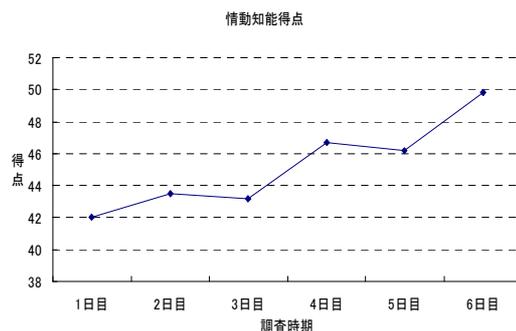


図1. 情動知能得点の変化

1日目から6日目にかけて得点の向上が満たされた。プログラムは冒険的内容を多く含み、児童にとってつらい坂を我慢したり、仲間と協力したりする場面が多く存在する。またその場面状況に合わせた判断や行動を必要とするため、情動知能得点が向上したと考えられる。

特に、4日目に向上した要因として、40kmのハイックプログラムが挙げられる。峠をいくつも越えていく中で、身体的限界が近づく中で自分への挑戦や仲間との励ましあい、ゴールへ進もうとする意思などが児童の心の変化として現れた結果ではないかと考える。

また、最終日についても得点が向上したが、はじめはできるかどうか不安があったプログラムの中で、6泊7日のプログラムを終えるという達成感や充実感といったものが影響を与えているのではないかと考える。

###### ② 児童別に見た情動知能の変化について

野外教育プログラムにおける児童の情動知能の変化について、児童別にその得点変化を見ると共に、プログラム指導に当たった班付きカウンセラー報告からその変化の要因について検討する。

以下は対象となった児童の中で、特徴的であった者の情動知能得点の変化を図2～図6に表した。

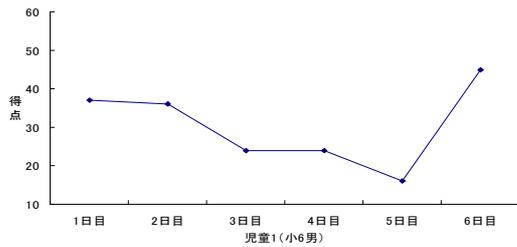


図 2. 児童 1 における情動知能得点の変化

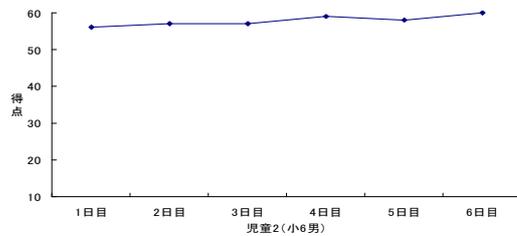


図 3. 児童 2 における情動知能得点の変化

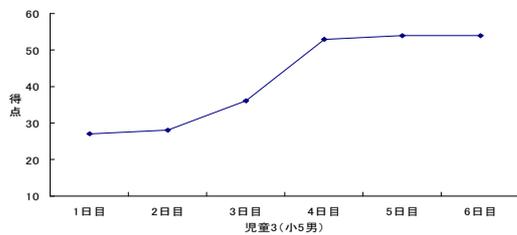


図 4. 児童 3 における情動知能得点の変化

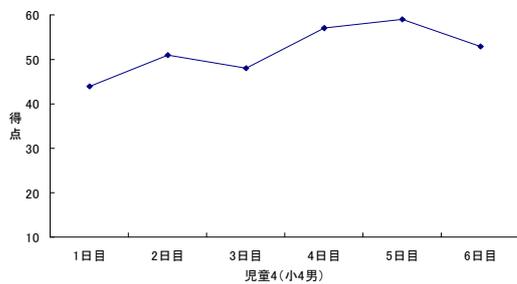


図 5. 児童 4 における情動知能得点の変化

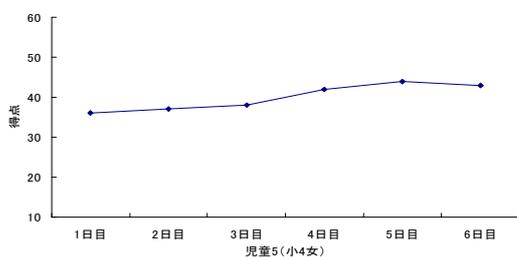


図 6. 児童 5 における情動知能得点の変化

児童 1 については、プログラム初日から 5 日目にかけて得点は低下した。小学 6 年ではあるが、体力がなく、ペースが落ちて集団についていけなくなっていた。また、さらにマウンテンバイクでの転倒も多く適応できていない状況が影響していたと考えられる。項

目「今なにをすべきなのかいつも考えいる」については、プログラムを通して低く、仲間との話し合いの時間や班付きカウンセラーとの話においても積極的な態度は見られなかった。また、峠越えでもすぐにあきらめてしまう場面も多く見られた。しかし、6 日目にかけて得点の向上が見られた。自らの不注意からマウンテンバイクにて転倒したものの、ゴールに到着したという達成感やみんなと協力したという満足感が現れた結果であると考えられる。

児童 2 については、プログラムを通して情動知能得点が高かった。常に元気があり、初日から仲間のことを見ながら声をかけており、ミーティング時にも「リタイヤしそうだったけど頑張ってみるとできるものだ」といった発言も見られた。また、休憩時などの時間には自分から積極的に周りの子どもと仲良く遊ぶ姿も見られた。プログラムを通して常に先頭のグループを走りながら仲間を引っ張っていた。

児童 3 については、はじめのうちは周りの人の話を聞かず、体力もなかったために集団の後方を走っていた。しかし、班の中でのコミュニケーションがとれるようになってからは峠越えなどでもあきらめることなく一生懸命に活動していた。特に、「みんなを引っ張っていくことができる」、「自分が思っていることを口に出して言える」の項目において 4 日目からの得点向上が著しく、仲間やプログラムに慣れ、対人関係を築けたことが得点向上の大きな要因になっていると考えられる。

児童 4 については、参加者の中では最年少の 4 年生と言うこともあったが、その分年長からもかわいがられていたことがプログラム初日から得点が高かった要因と考える。また、3 日目に得点が低下した要因として、楽しそうに活動はしていたものの、体力的につらい時間が多かった様子で、「みんなを引っ張っていくことができる」、「新しいことを先頭に立って考えることができる」の項目において得点が低かった。異年齢集団の中での特色が出た結果と考える。

児童 5 については、女子の小学生である。情動知能得点の変化はあまり見られないが、はじめは人見知りな部分があったが、冒険的活動を通して、積極的に発言したり、男の子の仲間とも励ましあいながら活動をしていた。前日のミーティングでは、峠越えで歩いてしまうかもしれないと話していても、当日になるとがんばって登るなど、積極的な面も見られた。

以上から、冒険の要素を多く含んだ野外教

育プログラムにおいて、児童の情動知能は向上することが明らかになったが、児童一人ひとりの向上のプロセスには違いが見られた。そのため、情動知能を育むための野外教育プログラムの開発においては、自然が持つ教育効果を存分に活かすことはもとより、指導者が児童の状況を十分に把握し、かかわりを持ちながらグループをコントロールする必要があると思われる。

本研究では、児童の情動知能について、児童用情動知能尺度を作成すると共に、野外教育プログラムにおける効果について明らかにすることを目的とした。今後は、野外教育プログラムに参加した児童の日常における育成環境にも注目したい。また、発達段階の違いによる情動知能の発達の特徴に見合った、より効果的な野外教育プログラムの開発及び指導法の開発を行う必要があると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒澤 毅 (KUROSAWA TAKESHI)

びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・  
准教授

研究者番号：80367911